

## 宮崎汎会員が見た世界の旅第2部人物編第45話

### トルコの越し方とケマル・アタテュルク トルコ

親日国トルコは魅力的な国である。対日感情はとてもよく旅をしていても心地よい。何故だろうか。その原点は明治23年(1890年)明治天皇への親書を携えた親善大使を乗せたオスマントルコの軍艦エルトゥールル号が帰国の途上、和歌山県串本町沖で台風の余波を受け沈没してしまった。この時串本町民は献身的な救護活動にあたり乗員656人のうち69名を救出したが多くの犠牲者を出す大惨事となった。

この事件をトルコでは歴史教科書に載せたため広く知られることとなり、以来トルコ国民は日本に対し好感情を抱いてくれるようになったのである。

ところでトルコと言えばまず思い浮かぶのはオスマン帝国である。西欧諸国が中世から近代へ向けて脱皮しようとする時期にとって、最大の脅威はオスマン帝国の存在であった。オスマン帝国は6百数十年続いたイスラム教の超大国で、当時は世界を睥睨する強国であった。



オスマントルコのスルタンの居城

やがてオスマントルコの凋落に歯止めがかからず、トルコは西欧の列強に敗れ、あわや国自体が消滅の憂き目にあった。この時登場したのが救国の士ムスタファ・ケマルであった。ケマルは辣腕を奮い、旧弊にどっぷり浸り時代から取り残されたトルコを救ったのである。

トルコの越し方を概観してみると、トルコ人はアジアの内陸部に住む遊牧民族であった。因みに突厥やウイグルなどはトルコ民族である。トルコ民族は勇敢で、戦いに巧みで、しかも組織の支配者としての能力を

も兼ね備えている民族と言われている。

11世紀、中央アジアからイラン高原に進出したムスリム王朝をセルジュークトルコと言うが、(ムスリムとはアラビア語でイスラム教徒を意味する)セルジュークトルコの君主は、アッパス朝(イスラム教の教祖マホメットの叔父の子孫にあたるアブル・アッパスが建てた国)のカリフ(イスラム社会の最高指導者)の守護者となり、さらにはカリフに代わって政治を司ることになりスルタン(権力者の意)の称号を与えられた。以来スルタンの呼称はイスラム国家では君主の称号として使われるようになったのである。

セルジューク朝はスンニ派の守護者となるや西アジアにおけるイスラム教の主導的地位を確立していった。セルジューク朝のスルタンはアナトリア地方へ侵攻し、ビザンチンの軍を破り宗教的にもギリシャ正教の地をイスラム教の地に変えていった。

アナトリアは小国に分れていたが、1299年オスマンを盟主とするオスマン朝が次第に勢力を持ち、セビリア・ブルガリア・ルーマニアを撃破し1394年には東ローマ帝国の首都に迫った。

1402年ティムールの軍勢に敗れオスマン朝は危機的状況に陥ったが、マホメット2世の時代になると国力を盛り返し1453年、1000年続いた東ローマ帝国を遂に滅亡へ追い落とす。

1517年エジプトのマムルーク朝を撃破しオスマン朝はイスラムのスニ派の主導的地位を得た。

1571年キリスト教勢力であるスペイン艦隊との海戦で初めて敗北を喫し、さらにウィーン市包囲の失敗などによりさしもの強大なオスマントルコも次第に衰退に向かった。

18世紀初頭は西欧各国と良好な関係を維持し平和な時代であったが、後半にはロシアとの戦いでクリミア半島をエカテリーナ2世に明け渡し、次いでバルカン半島の独立運動に西欧列強が介入、ロシアの南下などで広大なトルコ領は縮小していく。そしてロシアに対抗するためドイツと提携し、はからずも第一次世界大に突入したが敗北を喫した結果、領土のほとんどを失いアジアの小国になってしまう。ここに登場するのが救国の士、ムスタファ・ケマルである。その足跡をたどるとオスマントルコから近代トルコへ脱皮する過程が見えてくる。

ムスタファ・ケマル・アタテュルク（1881年～1938年）は、オスマン帝国の将軍、トルコ共和国の初代大統領、建国の父として今日に至るも高い評価を得て国民の敬愛的となっている。ケマルの近代化に向けての業績は数えきれないが、一口で言うと消滅しかけたトルコと言う国を存続させ建て直し、さらに近代化を推進した英雄とでも言えようか。

建国の父、ムスタファ・ケマルはオスマン帝国領であった現ギリシャ領テッサロニキで税理士の子として誕生する。幼名はムスタファと言うが、後ムスタファ・ケマルさらに大国民会議から贈られた姓アタテュルク（＝トルコの父）を使いムスタファ・ケマル・アタテュルクと称した。

第1次大戦時には大活躍したトルコの英雄である。特に要のダーダネルス海峡を突破しようとした英仏連合軍を撃退し勇名を轟かせた。

1919年にトルコ革命が始まる。戦勝国によるオスマン帝国分割工作がなされた。国の存亡が問われるとき、ケマルはアナトリアの住民を訓練し国民軍を組織した。それと共に臨時国民議会を召集し祖国解放運動を推進する。

1919年イギリス艦隊とギリシャ軍がイズミールに上陸し内陸へ進軍してきた。アンカラを目指すギリシャ国王コンスタンチノスの指揮するギリシャ軍を迎え撃ち激戦の末やっとこれを打ち破りトルコの存亡の危機を救ったのである。

余談ではあるがこの勝利に貢献したのは日本の大宗教家大谷光瑞である。大谷光瑞は日本の陸軍はじめ力のある政治家へトルコ支援の必要性を説き、大量の武器弾薬を贈ったのである。

ムスタファ・ケマルはトルコ国民党を組織しセーヴル条約を破棄するため武力闘争に立ち上がった。1920年アンカラで大国民議会が開かれケマルは議長に選出された。ここに主権は国民にあり大国民議会は国民の意志を代表する唯一の機関であることを内外に向けて宣言した。

占領軍の下にあるオスマントルコ政府を認めずこれを非合法とした。これに対しオスマントルコ皇帝メフメット6世はケマルの討伐さらには死刑宣告をした。

連合国はスイスのローザンヌにイスタンブールのスルタンの率いる政府とアンカラに拠点を置くトルコ国民軍であるケマル率いる政府双方を招いた。

ムスタファ・ケマルはギリシャと休戦条約を結び、同時に政教分離とオスマン帝国のスルタン、カリフ制廃止を目論み、1922年アンカラの国民議会は長年続いたスルタン制廃止を宣言した。こ

れをトルコ革命といい、ここにオスマントルコ支配は終止符をうったのである。

連合国はセーヴル条約を破棄し、ローザンヌ条約によって、トルコはイズミール、トラキア東部の領土を回復しさらに賠償の負担からも解放された。

1923年トルコは共和制を宣言し、首都をイスタンブールからアンカラに遷都し、ケマルは初代大統領に選ばれ、以後死去するまでの15年間に渡り独裁的な権限を持ち古い体質のトルコを近代的な国家にするための努力を続けた。

オスマントルコのスルタン、マホメット6世はイギリスの軍艦でマルタ島に亡命し、さらにイタリアのサンレモに移り1926年ここで没した。1299年以来623年間も君臨し続けた強大なオスマン帝国が名実共に消滅したのである。

トルコ大国民議会はメフメット6世の従弟であるアブドゥル・メジト2世を宗教で権威をもつカリフに任命した。

トルコは国の近代化に向けて政教分離を断行した。即ちイスラム教に基づいた政治体制を宗教と政治を分離し、憲法からイスラム教をトルコの国教とする条文を削除するなど抜本的な大改革を成し遂げたのである。



アンカラにあるケマル・アタテュルクの霊廟



ケマル・アタテュルクの棺

ケマル・アタテュルクは政治と宗教の分離、イスラム法の廃止、女性権利の大幅拡大とイスラム教の制度である一夫多妻を禁止、アラビア文字を廃止しローマ字の採用など旧弊を打ち破るため存分に力を奮い、加えて農業改革、軽工業や重工業振興など経済面でも力を尽くしたのである。

国力を回復したトルコは1936年の国際会議でダーダネルスの再武装化の権利を勝ち取り、イラク、イラン、アフガニスタンと不可侵条約を結び、近隣諸国との集団保障によりトルコの安全をはかったのである。ケマル・アタテュルクは首都アンカラに葬られ国民の敬愛を今に集めている。